

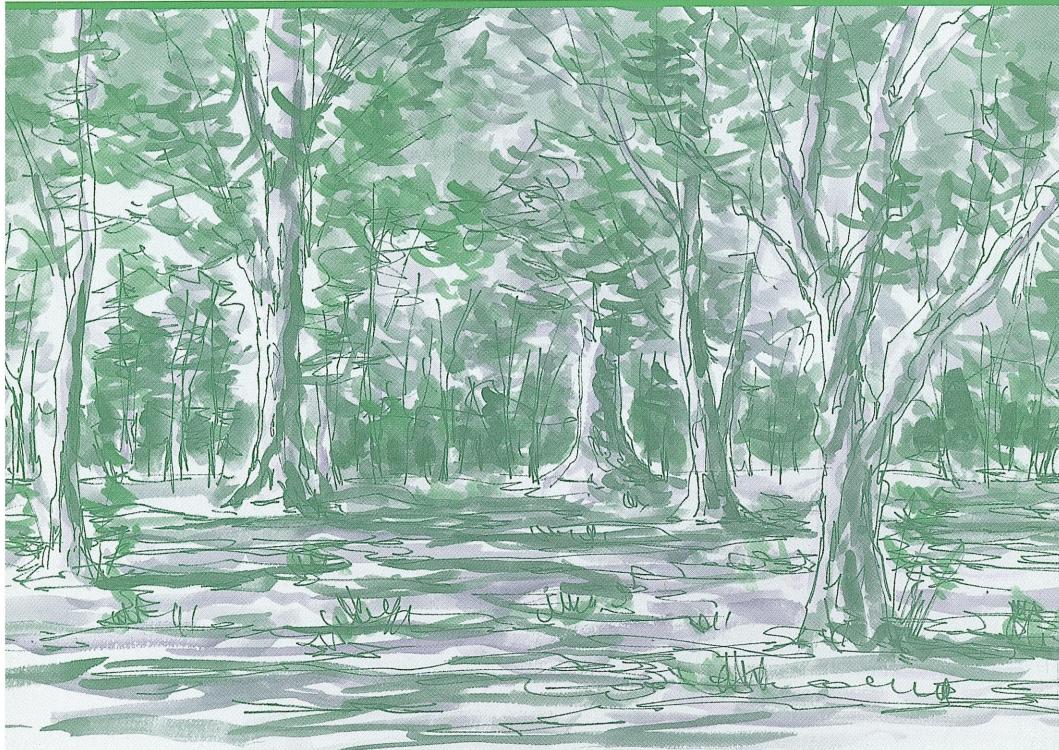
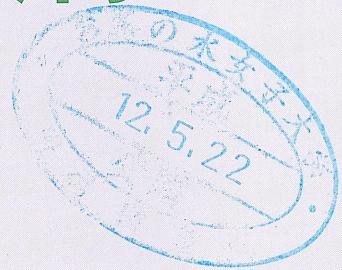
幼児の教育 第99巻 第6号 平成12年6月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可 ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

2000

/ 6



第99巻 第6号 日本幼稚園協会

最新刊

子どもたちの大好きなアンパンマンファミリーの人気者を手づくり
しよう。おもちゃやプレゼント、壁面飾りで保育室はいっぱい!!

手づくりアンパンマンがいっぱい(全3巻)



グッズ・プレゼント

スポンジや牛乳パックなどの身近な素材を使ったグッズ。
フェルトのかわいいプレゼント小物。残り毛糸で、すいす
いあんごボウシやボールに変身するアンパンマン。うちわ
やエプロンなど身の回りのあちこちに人気キャラたちが顔
を出す、アイデアいっぱいの一冊です。

島田明美／著

A4判 96頁 定価：本体2,000円+税



ルームデコレーション

人気キャラクターたちで、保育室の壁面を明るく楽しく演出。
入園おめでとうのバナーレイ、4月から3月までの月ご
との壁面構成は、子どもたちの想像力でゆかいなおはなし
も生まれることでしょう。入場門やお店やごつこの屋台・
コーナー飾りなど応用アイデアもいっぱいです。

千金美穂／著

A4判 96頁 定価：本体2,000円+税



ぬいぐるみ・おもちゃ

型紙をあてて布を切り、ちくちくぬって化せん綿をつめる。
むずかしそうなぬいぐるみも、コツベさんまんに手ほどき
してもらえば、あっ、もうできちゃった！人形やクッション、
フリスビーなど遊べるキャラクターたちは、やわらかく安全なので小さい子どもたちにも安心です。

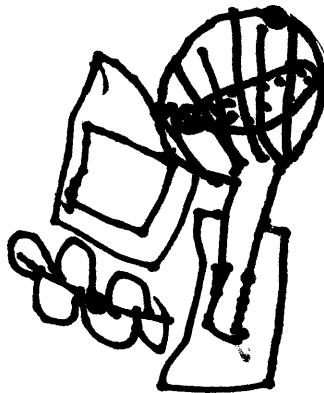
コツベ平沢／著

A4判 96頁 定価：本体2,000円+税

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第99巻 第6号



幼児の教育 目 次

第九十九卷 第六号

次

© 2000
日本幼稚園協会

幼稚園誕生の時代—関信三の葛藤—

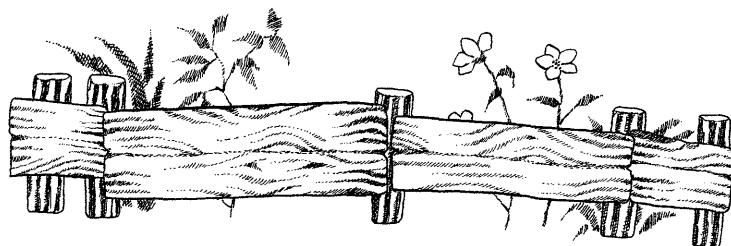
(二) 幕末・維新のはざまに生きて 国吉 栄 (4)

い・ざ・こ・ざ 赤石 元子 (14)

いま、子どもたちは 母子のいま(2)親子の状況 山崖 俊子 (20)

私が幼児教育を志した頃(8) 津守 真 (28)

耳をすまして 目をこらして(3) 宮里 曜美 (36)



特集「みる」

- 宝探しのお仕事 山岸 幸子 (38)
見る 高橋たか子 (42)
「見られる子ども」、「見せる子ども」 井口 真美 (46)
みる 中島ふじ子 (50)

「よかれ」を見つめ直す手がかりとしての「物の置き場」の意味 佐伯 一弥 (56)

表紙絵／田中 千尋

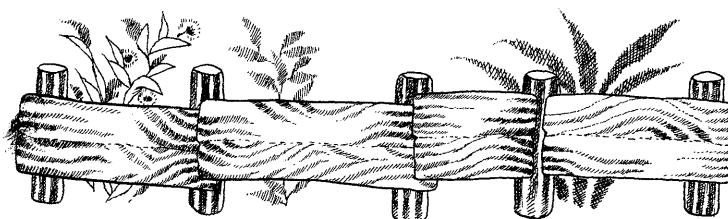
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・田中三保子・高橋 陽子

編集部／仲 明子





幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉栄

(二) 幕末・維新のはざまに生きて

京都

京都駅におりたつて烏丸通りを北にしばらく歩く
と、真宗大谷派の總本山、東本願寺がある。烏丸通り
と花屋町通りに面する二辺には堀が巡らされていて、

寺院というより、ちょっととしたお城のような感じがす
る。

境内に入ると、深々とした大屋根をいただいた阿弥
陀堂と、そのすぐ右手に世界最大の木造建築物とされ
る御影堂が並んでいた。

幕末の東本願寺の歴史を読むと、たびたび、「兩堂

焼失」と書かれている。京都は町屋が密集しているこ

ともあつて、火事の多い土地がらであつた。けれども

東本願寺がこうむつた火災による被害は尋常ではな

い。慶長七（一六〇二）年に徳川家康に寄進を受けて

この地に移転して以来、東本願寺はたびたび火災にみ

まわれた。特に江戸末期の八十年間には、実に四回も

全焼している。けれども東本願寺はそのたびにすぐ再

建に取りかかつた。幕府も数千の飛驒の巨木を寄せる

などしてその再建を助けてきたのである。

しかし、幕末もおしつまつた元治元（一八六四）

年、蛤御門の変の戦火によつて全山を焼失すると、さ

しもの東本願寺もすぐに再建に着手することはできな

かつた。徳川幕府が崩壊したからである。

東本願寺が徳川家の恩顧を受けて隆盛を誇つたこと

は、幕府の終焉に際して圧倒的な重圧となつてのしか

かつた。慶応三年十月、將軍慶喜が大政を奉還する

と、東本願寺はまつたく後ろ盾を失つてしまふ。

明治元年一月五日、東本願寺は、山階宮晃親王を介して次の誓状を朝廷に差し出した。

「朝廷遵奉の儀、光宝（こうぼう）を始め、門末一統更に異心これなく候。徳川家由緒の儀は軽く、天恩の義は重く候ゆえ、決して心得違ひ申すまじく候。然る上は如何なる体の御用をも持承支度、この段宜しく御執奏願い上げ奉り候」

直前まで幕府のために兵を挙げようとしていた東本願寺の狼狽と恐怖。関信三がやがて新政府の諜者となつて思いもかけない生涯を送ることになつたのは、この時の本山の苦境と決して無関係ではない。焼野原の本山は彼の長い旅の出発点ではなかつたろうか。

学僧時代

嘉永七（一八五四）年、十二歳になつた関信三は、ふるさと一色を出て京都に上つた。真宗大谷派の学徒

の総本山である京都高倉学寮（現在の大谷大学）に懸席したのである。関信三の僧侶時代の名は猶龍といふ。

この年は、ペリーが再び来航して、日米和親条約が調印され、鎖国にピリオドが打たれた年であった。時代は、誰の力によつても抑えられない勢いで動き出していた。当時高倉学寮は高倉魚棚（現六条）にあつたが、猶龍が学徒の最高位である寮司になつた年、蛤御門の変によつて、学寮は本山とともに焼け落ちた。

猶龍は学問修行時代、本山足下の高倉学寮だけでなく、外にも学問の道を求めた。早くも十四歳の時には、豊後の国、日田（現在の大分県日田市）の広瀬淡窓の咸宜園に入門している。父親がわりの長兄、安休寺晃耀が、流動する天下の形勢をにらみ、猶龍に広い視野で学問をする道を開いたのである。僧侶として必要な漢学のためだけなら、兄は末弟を遠い豊後の国まで送ることはなかつたであろう。

自由な学風で知られていた咸宜園は、当時全国最大規模の私塾で、各地から学生が集まっていた。高野長英、大村益次郎もかつてその門人であつたという。淡窓は、門下生のうち、大村益次郎ほど寝ても覚めても食事の間も國の将来を案じていた者はいない、と言つている。大村益次郎ほどではなかつたにせよ、咸宜園の実践的な学風の下、当時の塾生たちの共通の話題であり、課題であり、また使命としていたのが、國を憂い、我いかに為すべきか、であつたろうことは想像に難くない。

猶龍はこののち、強硬な佐幕論者であつたという津の土井聰牙にも入門している。彼の学問への意欲と志す方向性はしだいに固まつていつたように思われる。

文久二年、彼の志を決定する出来事があつた。兄晃耀が、その師香山院龍温とともに横浜におもむき、キリスト教事情を見聞してきたのである。香山院は本山

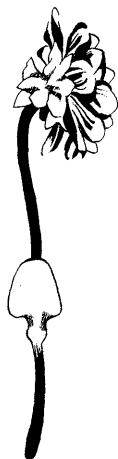
から耶蘇教懸防掛に任命された人物で、東本願寺の対キリスト教対策の中心的な存在であった。

その時二十歳になつていた猶龍は、横浜から帰つた

ないだろうか。
檄にこたえて

兄から直接、そのありさまをつぶさに聞いた。兄の口を通じて語られた天主堂の見事さ、わがもの顔の異人たち、居留地のにぎわいは、彼に衝撃を与えずにはおかなかつた。猶龍は香山院のもとで、漢籍を通してキリスト教を学び始める。

猶龍のよう、学問もあり行動力もある若い僧が、東本願寺の僧として幕末の時代を生きるのは難しい。西派であれば、現にそうした僧侶たちがいたように、討幕派の長州と結んで、戦いに身を投じることができた。それは西本願寺本山の意に添うものであつたから、それによつて、尊皇護國の実をあげるとともに、己の属する集団に忠誠を示すことができたのである。しかし、そのような道を開ざされていた猶龍にとって、邪教研究は唯一自身を生かす道だつたと言えるのでは



宜園での実践的な学問の方法と、そこでともに学んだ他派、他分野の人々との交流を通して、猶龍には外から見る視点が養われていた。彼の護法運動が、単にキリスト教排斥にとどまらず、現状を認識し、そこから仏教界の改革へと向かう広い裾野を持つていたことに注目したいと思う。

当時の学寮にあっては、護法のためとはいえ、邪教としていみきらわれていたキリスト教を学ぼうとする者は、少数者であり、異端であった。長岡の檄はそんな猶龍を力づけ、後押しするものであった。しかも長岡は、「護持の方便、蓋し其人に存す。此を非とし彼を是とする者は仮敵なり、國敵なり」とまで言う。猶龍は、この力強い檄によつて、僧侶として皇國のために働く道を確信したのである。

新政権にとって、仏教は旧政権に属する遺物であった。幕府は鎖国とキリストン禁制を貫くために、寺院を民衆統治政策の要として利用し、寺院はその代償として、民衆に対する強力な支配力と、安定的な経済基盤を手中にしてきたのである。幕府が倒れた今、新政権が仏教を排除し、神道によつて天皇中心の新しい國家を建設しようとしていたのは、誰の目にも明らかであった。

徳川慶喜が大政を奉還すると、維新政府はただちに王政復古の大号令を発した。そして明治元年三月、神

明治元年七月、仏教存亡の危機に際し、真宗各派は三百年来の恩讐を超えて協定を結んだ。そして新政権に対し仏教の有用であることを示すため、各派足並み

そろえて長崎のキリスト教説を願い出たのである。

これをきっかけに、それまで宗門内で閉ざされていたキリスト教研の道が公に開かれると、猶龍はいよいよ活動の場を得ることになる。キリスト教排斥に身

命を賭して立ち上ることは、彼にとって長岡の檄に応えることでもあった。この時、若い猶龍には、海援隊の檄に呼応する、いわば草莽の志士のような心が芽ばえていたのではないだろうか。

長崎へ

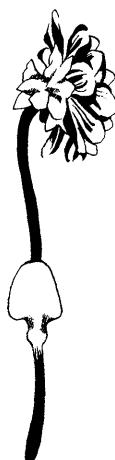
維新政府が発足した夏、猶龍は本山の命によつて、キリスト教研および探索のため、長崎に派遣された。二六歳の時である。

当時長崎は、日米修好通商条約の締結を受けて、神

奈川、函館とともに開かれた自由貿易港であった。条約で外国人が居留地内で礼拝することが認められていたため、自國の人々のためという名目で、各派の宣教

師たちが相次いで来日し、礼拝堂を建設した。その結果、新政府がとうてい黙認することができない状況が出現したのである。

慶應元（一八六五）年、居留外国人のために大浦に天主堂が建立されると、浦上村の男女が天主堂を訪れて祖先伝來の信仰を告白した。旧キリスト教説の報は全世界に歓喜をもつて迎えられた。これをきっかけに隠れキリスト教徒は燃え上がり、ついに表面化することになる。これに対し新政府は旧幕府以上に厳しい態度をとり、主要信徒一一四名を三藩に分け流罪とし、三千人に及ぶ一般の信徒を村預けの処分とした。真宗各派が願い出た異教徒教説とは、これらのキリスト教徒を改宗させるためのものであつた。



長崎に着いた猶龍は天主堂下手の妙行寺をねじろに、隠密活動に従事した。彼がまず試みたのは、キリスト教の村々の探索である。兄は弟の長崎報告の一部

を、破邪学の講義の中で次のように紹介している。

「現に長崎におひては、仏壇は勿論、戸口に張れる神札神棚等を、ことごとく排除、先祖の位牌迄も、みな破却いたしたことなり。これは現に私の実弟寮司猶龍なるもの、本山の内命を蒙りて、此度長崎大浦妙行寺に滞在せり。夫より送り來たれる述書の中に申してあり」（安休寺見耀講述『護法總論』）

やがてこれらのキリスト教徒たちは、女も子どもも老人も、ひとり残らずかき集められて流罪となつた。史上名高い浦上四番崩れである。流刑地で死んだ人々も多い。この時、キリスト教徒のあぶり出しと検挙に裏面から全面的に協力したのが、猶龍の同志である東西本願寺の破邪僧たちであった。僧侶たちは寺の屋根に登つて、キリスト教徒たちが護送されていく船をうち眺

めながら、喝采を叫んでいたという。後日破邪僧たちは、長崎県庁から、この時の働きに対し褒賞金を受けている。

幸いにも、と私は思うが、猶龍はその時すでに大坂に転じていて、キリスト教徒の捕縛には関わっていないかった。当時彼自身は、この「快挙」に加われなかつたことを無念に思つたかもしれない。しかし年月を経て、彼はこれが史上まれにみる大弾圧であつたことに気づく。もし彼がこの時仲間の僧侶たちとともに勝利の美酒に酔つていたとしたら、のちの「関信三」はなかつたであろう。のちに閑信三と幼稚園との出会いについて書くときにふれるつもりであるが、これからおよそ八年を経て幼稚園に出会つた時、彼は当時の日本人の誰よりも、信教の自由について考える人物になつていた。キリスト教徒の村々での体験は、彼の原風景になつたのではないだろうか。

潜伏

浦上探索の一方で、猶龍は、日本に入り始めたばかりのプロテスチアントの宣教師に接触を図っている。彼

自身の言葉によると、英國聖公会のエンソールに師事して、キリスト教研究および探索をしていたという。けれどもある日突然、彼の活動は頓挫する。幕末のころから活動していた西派の僧侶たちの中から、ほん

とうにキリスト教に改宗するものが出て、猶龍の正体

を宣教師に知らせてしまったのである。この時、猶龍ら東派の僧侶たちは西派の僧侶たちに激しく抗議し、今後このようなことが決してないようにと、東西両派の僧たちの間で誓定書が取り交わされた。

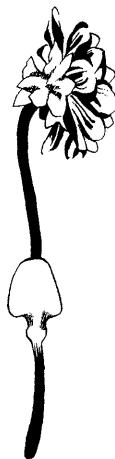
猶龍らが激怒したのは、内通によってキリスト教研

究の道が断たれたからばかりではなかった。たとえ破邪のためであつたとしても、徳川以来禁制のキリスト教に近づくことは、それ自体、危険極まりないもので

あつた。事実、この直前に、同僚の僧侶が攘夷派の浪士から切りつけられていた。彼らの、邪教研究・探索は文字通り命がけのものであつた。

二年四月二二日付の本山あての書状で、猶龍らは、「護法之微忠一飯も忘却仕付得候得共、一往之成功も不奉奏半途ニして虎狼之如き暴人之為ニ暗斬等被致候」、「今や一生之永別ニ相成候哉も難計左候ハゞ一仏淨土と來縁を期する計りに御座候」と書いている。

彼らは一時避難を決意し、猶龍は島原へ逃れた。しかし間もなく再び長崎へ出て、長い潜伏生活を送る。けれども討邪の意志は少しも変わらない。そして驚いたことに、彼らは本山の切迫した情況を察して、以前願い出していた資金送付依頼を取り消して、今後一切の



給与を辞退する旨を言上したのである。

ているのである」と述べている。

東本願寺の北海道開拓

この頃、東本願寺は、いよいよのっぴきならない事態に追い込まれていた。明治二年六月五日、新政府に対し、北海道（蝦夷）開拓を出願したのである。

北海道開拓で東本願寺が負担した費用は、しめて三万三四五七両。東本願寺の教団誌『教化研究』は、「資料・真宗と国家」（昭和50）の中で、「新政府への莫大な献金、累積した借財、両堂を焼失したままの東本願寺が、あえて北海道開拓という無謀ともいえる一大事業にとりくんだことについては、当時吹き荒れていた廢仏思想に対し、教団が国益的存在であることの実を上げる必要に迫られていたといわれている。幕末明治初年の宗教担当者の苦悩もさることながら、地方門末の負担、苦しみの程が察せられる。しかしながらこの後も、両堂再建、負債償却という重荷が待ち受け

猶龍の護法運動は、宗門を護る、すなわち東本願寺を護るという意志によってその根底が支えられている。宗門を護ろうという彼の意志は、強いられたものではなく、僧侶という彼自身のアイデンティティーに起因するものであつた。北海道開拓という途方もない事業を東本願寺が引き受けざるを得なくなつた時、猶龍らは潜伏中の身にもかかわらず給与辞退を申し出した。それは、政治的経済的に追いつめられた本山に対し、改めて忠誠を誓つたことを意味する。青年僧の思い詰めた心情、無私の心は、本山に対するロイヤリティーの高さを示すものであろう。

東本願寺が本山の再建に着手したのは、明治も二十一年代になつてのことである。壮大な御影堂や阿弥陀堂、京都三大門のひとつとされる御影堂門をはじめ、現在の建造物はすべて、それ以降に再建されたもので

ある。

御影堂と阿弥陀堂を結ぶ渡り廊下には、再建にあつて巨材を引くために門徒の髪をより上げて作つたという「毛綱」が展示されている。焼け尽くされた本山を、門徒はわが身を削つて再建したのである。

東本願寺の門前に立ち、門徒農民の壮大な寄進の上に再建された巨大な瓦葺き屋根を見上げると、関信三もそのような人々のひとりであったのだと思えて、胸の中に痛みに似た感情がわいてくるのを感じた。

明治三年秋、猶龍は、いよいよ政府の諜者となつて、活動の舞台を横浜に移すことになる。次回は、彼が書いた「諜者報告書」を中心に書いてみたい。

註

関信三の猶龍時代については、徳重浅吉『維新政治宗教史研究』（日黒書店 昭和10）が最も重要な文献である。

周辺については、『東本願寺史料』（東本願寺宗学院編修部編 名著出版 昭和48）ほか、真宗関係の各種史・資料集、叢書類が参考になる。

仏教関係で関信三を取り上げたものとしては、織田顯信「我国幼稚園教育の先覚者安休寺猶龍（別称安藤劉太郎、関信三）伝攷」（『同朋大学論叢27号』昭和47）があるが、長崎時代以降について新しい資料は含まれていない。

い・ぞ・こ・ぞ

赤石 元子

この頃、私は子どものいざいざについて思いをめぐらせて いる。

自園の研究テーマに迫る窓口としていざいざの場

面をとりあげているからなのだが、このことが日頃の私の子ども理解や援助の仕方を搖さぶっている。

“いろいろ”を楽しんで

一緒に暮らせるように

幼稚園は、子どもにとつて楽しいところでもあるが、また結構大変なところでもあると思う。「みてみて！」と目を輝かせる姿、仲間同士で頭を寄せ

合って話し込む姿、怒りながら泣き、泣きながら笑う子どもの姿……ワクワク・ドキドキする暮らしひ場である。

怒つたり泣いたり、物を取り合ったり、言い合つたりするいざこざもあちこちで起ころる。ありのままの自分を出して、ぶつかりあう。いざこざは、自分と相手の違いを知る貴重な体験だ。『違い』を知り認め合えるように、『いろいろ』を楽しんで一緒に暮らせるようにと願っている。

とはいって、現実の保育の多忙さに追われる私は、

できるだけいざこざが起こらないように先に先に手をうつたり、時には感情的になつたりして、いざこざをおおらかには受け止められないことが多い。

また「○ちゃんは嫌な気持ちだよね」などと子どもたちの気持ちを言葉にして代弁し、仲介し、整理したりもする。こうしてかかわりながらも、どこか子どもとかみ合わない感じがすることがある。これは大人

の自己満足にすぎないのでないかと思うことがある。

踏みとどまつてよく見ていると、子どもは、いざこざの中で悩みもするが結構たくましく乗り越えていくことに気付かされる。もつと子どもを信じてまかせてもいいのではないか。言葉ではなく体で実感できるようなかかわりが必要なのではないかと思うのである。

遊びの中で・体で感じて

三歳児の様子を見る機会

があった。

Aが箱ブラ

ンコを思いつ

きりこいでいる。スピード



がたまらなく快感という様子。一緒に乗っていたBは、そのスピードがだんだん恐くなり「止めて」と言う。何度か言うが、Aは「ダメ」と言い返しいつこうにスピードを緩めない。Bは泣き顔で「おりるうー」と叫ぶ。するとAが「お昼のサイレンが鳴つたら止まるよ。お昼になつたら公園に着くから」と言う。Bはさつと泣くのをやめ「お昼のサイレン鳴る？」と心配そうに聞く。Aは「鳴るよ」と穏やかに答え、スピードを加減しブランコを止める。Bはブランコを降りて砂場で遊び始める。

子どもの解決の仕方は、何と身近な遊びの中にあるのである。あんなに泣き叫んでいたのに「お昼のサイレン」で通じ合い、ピタッと納得して泣きやむ。きっといつも「お昼のサイレン、ボーンボン」の合図を楽しみながら遊んでいたのだろう。子どもが遊びの中でイメージをゆき交わせ、納得して折り合いをつけていく姿は見事だなと思う。同時に、体

の感覺を通して自分と相手の感じ方の違いを知つていく。Aは、自分はもつとスピードを出したいけれどもこらでやめようというところを自分で判断している。Bは、ちょっと恐いけれど我慢しようと自分の許容範囲を広げている。互いに違いを感じつづり合いをつけている。体を使って遊んでいること、遊びの中でのイメージをゆき交わせていることがいざこざを乗り越える力になつてゐるようだ。

もしここで私が介入していたら、「Bちゃんが嫌がつてるよ」と言葉で気持ちを代弁していたかもしれない。Aはブランコを止めるかもしれないが、それは自分で感じ判断して行動することから学び得たものとは異なる。相手の気持ちに気付かせようとする大人の教育的な介入が、むしろ子どもの生きる力や関係性を弱めてしまつてることも多いのではないだろうか。もっと、遊びに目を向け、体で感じ合うことに注目しなければと考えさせられる出来事だつ

た。

仲間関係・ルールのある遊び

五歳児になると、子どもたちは、その遊びの楽しさを求めて友達と集まるようになる。友達と一緒にルールのある遊びを楽しみながら互いの距離のとり方を学んでいく姿の中には、今まで私がとらえていた以上に葛藤があるよう思う。

私の担任している子どもたちは、毎日のように鬼ごっこやドッジボールをしている。最近強く思うことは、ルールのある遊びであっても、仲間関係に色濃く支配されているということである。仲間の性格や特徴がよくわかっているので、優位にある子どもがルールを勝手に変えたり、鬼役の子が誰であるかによってルールが容易に変更されるなど、遊びが仲間関係に大きく影響を受けている。

六月の高鬼で、Cは、仲のよい友達と自分は狙わ

ないように鬼のDに告げる。Dは仕方がないという表情で、狙う子を限定する。しかし、鬼が狙う子を限定した高鬼は、活気に欠ける。Eは「おもしろくないよ」とつぶやくが、正面きっては言わない。参加している子どもたちは、Cの主導権の基に動く遊びの中に自分なりの楽しさを見つけようとし、Cの言動に期待をもつてかかわっているようにも見える。敏捷で面倒見のよいところのあるCの魅力で遊びが進んでいる一方で、Cの力に支配される関係に不満も見られる。文句を言わないのは、仲間との関係を保ちたいという気持ちが働いているのだろう。この日私は遊びの仲間に入れてもらい、Eの「みんな走らないからおもしろくない」という言葉を受けた、「走ろう!」と言つて子どもたちを誘いだし、とにかく走る。すると、鬼のDは誰彼問わずに追いかけ始め、逃げる・助けるなどのやりとりを楽しむ幼児が増えてきた。

九月、エンドレスリレーを楽しんでいたが、Cが

自分のチームが勝っている時にゴールテープを出し

勝敗をつけるようになる。Fたちが「ずるい」と言

うがCは譲らない。リレーは中断。するとDが「も

う一回やろう！」と声をかけ、みんながスタートラ

インに並び始める。Dの言動でその場の雰囲気が変

わり、リレーは再開した。

遊びが人間関係に支配されすぎると不自由になり停滞する。表だつたいざこざにならない時ほど、心

は葛藤している。本来、不満に思うことがあれば対

等に言いあえることが基本だが、関係は微妙でなか

なか複雑である。こういう時に、いつでも正面きつ

て対決するとしんどいとともに子どもは体験を

通して知っていく。言いあうばかりでなく、他の方

法を選びだすというたくましさが求められている。

遊びを再開する、体を動かす、時には一人になるなど、子どもが新たな視点を見つけて乗り越える援助

が必要である。

心を解放し、遊

びの楽しさを体

得することが、

友達との絡んだ

糸を解きほぐす原動力になるようと思う。

十一月にはドッジボールが盛んになっていた。

「ドッジボールをしたい」と仲間入りする子どもが

増えてきている。相変わらずCは、友達がボールを

とるとそれが相手チームであっても「おれだぞ、渡

せ！」などと叫び、ボールを自分にバスするように

指示している。「なんでCにばっかり渡すんだよ！」

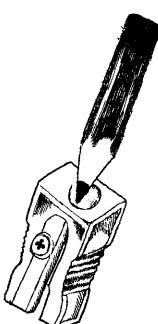
とDが文句を言うが、Cは止めない。するとEが、

「Cは、言つても言つてもだめなんだ。ぼくが當

たのに、透明人間だから出なくていいって言う」と

涙声で訴える。ゲームは一時中断し、みんながEの

まわりに集まつてくる。Cは「Gが僕のボールの当



たらないところにばつかり逃げるからいけないんだ」と泣きながら言い返す。するとHが「Gは悪くないよ。ボールが当たらないように逃げるのはいいことでしょ。当たらなくても、またすぐ投げればいいんだよ、ゲームなんだから」と言う。Dも「透明人間になると面白くなくなる。Eは悔しいと思うよ」と言う。

こんな場面はこれまでこの後もたびたびあつた。日頃Cの意向に沿うことが多い子どもが、平等なルールがあることで遊びが楽しくなることを体得し、自分たちの考えを主張するようになつてきた。大好きなドッジボールを友達と一緒に楽しみたい気持ちが強いCは、友達の主張が身に沁み、少しずつ自分の行動を調整するようになつてきている。

すつきりとはいかないジグザグの長い道のりの中に、あのワクワク・ドキドキ感がある。楽しくも厳

しいこの大勢の暮らしの中で、友だちのよいところも弱いところも知つてつき合うようになつてている。

そして、何よりも自分のことを振り返るようになる。いざこざを経験しながら自分と相手との世界を広げていく子どもの姿の中には、たくましさと希望がある。

子ども同士の関係の糸は、時に強く絡み合い解けにくくなつていてるようだ。また一方でなかなか絡み合わないという様相も見せてる。相手との違い、適度な距離のとり方、折り合いのつけ方を学ぶチャンスを子どもから奪つてはならないと思う。

(東京学芸大学教育学部附属幼稚園)

いま、子どもたちは

母子のいま

(2) 親子の状況

山 崖 俊 子

はじめに

今年の二月四日文部省から「子どもの体験活動等に関する国際比較調査」の結果が報告された。これはその目的を「日本及び諸外国の小中学校の児童生徒の家庭や地域での生活実態等を把握し、我が国の青少年の体験活動の充実を図るための施策の参考とする」というものである。詳細は報告書を参照されたいが、大まかなところは次の通りである。

①日本の家庭では、子どもたちのしつけが十分に行われていない。生活規律や社会のルール・道徳心に関して、父親からも母親からも家庭であまりしつけられていない。特に、「友だちと仲良くしなさい」「弱いものいじめをしないようにしなさい」「うそをつかないようにしなさい」などは日本の家庭が最も低く、「もつと勉強しなさい」ということも父親からも母親からもいわれていない。さらに、「近所

の人から叱られたこと」も最も少ない。しかし、「友だちとの約束を破つたこと」「学校の規則を破つたこと」は高い。

②日本の子どもたちは、総じてあまりお手伝いをしていない。特に、「買い物の手伝いをすること」「家の中の掃除や整頓を手伝うこと」「ゴミ袋を出すこと」「布団の上げ下ろしやベッドの整頓をすること」のように煩雑なもの、体力を使うものについて低い。

③日本の子どもたちの友人関係は総じて希薄である。諸外国に比べて、「いじめを注意したこと」「友だちのけんかをやめさせたこと」「悪いことをしている友だちに注意したこと」「困っている友だちの相談にのつてあげたこと」などが低く、友人との人間関係に積極的に働きかけるのを避ける傾向が目立つ。が、「友だちとけんかをしたこと」は最も多い。これらの結果、すなわち子どもに対する親の関わり

り方についても子どもの行動・態度についても、筆者を大いに驚かせた。なぜならば普段相談場面で、あるいは親たちの学習会に招かれて知り得る親の状況・子どもの状況とはかなり異なっていたからである。最もこの調査は子どもを対象としたものであり、子ども自身の受け止め方であるから、親の関わりの現実は恐らくかなり実態とは異なるはずである。しかし、それにしても……である。そしてその時あることに気づいたのである。

文部省の「子どもの体験活動等に関する国際比較調査」の結果をめぐって

調査対象となっているのは小学五年生と中学二年生であるから、彼らの親たちは丁度三十代後半から四十年代前半であろう。ということは、親たちが幼児期・学童期だったころというのは一九七〇年代から八〇年代にかけてということになる。当時の教育界

の状況を振り返ってみると、我が国では未曾有の高

度経済成長期の直前で「期待される人間像」という言葉が生まれ、一九六〇年代から「不登校児」というそれまで見られなかつた子どもたちの姿が現れはじめたのである。以来、「不登校児」の出現は止まるところを知らず、激増の一途を辿つて現在に至つてゐる。この現象に親たち・教師たちそして世間は大いに慌てた。何とかしてこの現象に終止符を打たねばならないと考えた。教育相談所は不登校児の相談であふれ返つた。戦後の目まぐるしく変わる社会

状況の中での、世間は期待すべき「子ども像」をどうとらえたらいいか、どのような子育てが理想なのか誰もが迷つていた。従つて、その時その迷いに対する回答として「不登校児にしないような子育て」に飛びついたのも不思議ではない。当時、「不登校」の原因論をめぐつての話題が、精神医学会・心理学會・教育学会ではもちきりだつた。筆者らも例外で

はなかつた。

実は今回の調査結果を目にした途端、そのころの「不登校児にしないような子育て」を地で行つたような結果であったと思ったのは筆者の思い込みか偶然であろうか？ 当時の筆者の職場は「児童臨床相談室」であり、「登校拒否の発生機序について」（註）という不登校児に関する初めての論文を出したのが一九七五年であった。

「不登校児にしない子育て」をめぐつて

筆者らがまとめた「登校拒否の発生機序について」という論文は、当時、教育界からかなり注目された。その主旨は、筆者らが当時相談室で関わつた不登校児三十四名について、彼らの幼児期・学童前期・学童後期の生活史に関して、その両親に対しても行つた質問紙調査の結果をまとめたものである。調査結果は、彼らに共通のエピソードとして①三歳前

後の反抗期がなかつた②自己主張が弱く、素直であつた③一貫しておとなしい子どもであつた④友だちとほんどけんかをしたことがなかつたという、一言で言うならば、いわゆる「いい子」で大人から見れば手のかからない子どもであつたといふものである。

この結果は当然といえば極めて当然であり、「子どもが子どもらしく」生きている姿、すなわち「子ども性」の条件は①自らの思いを率直に表現する、とらわれのない自由な姿であることと②大人に保護してもらわなければ一人では生きていくことができず、従つて、大人に合わせ従順になることで受け入れられる姿、言い換えれば①内的適応と②外的適応の両面の育ちが必要なのだが、前述の不登校児の共通した特徴は外的適応の育ちばかりが目につき、内的適応の育ちが押さえ込まれているという強い印象を受けた。その結果、思春期という抑えきれない

「性」の衝動、そしてそこから突き動かされる「自我」の芽生えを内包させた子どもたちは、それまでのバランスを欠いた自らの状況を維持しきれなくなる。彼らの本来の姿を露にせざる得なくなるのである。その「自分らしく」あろうとする姿が「不登校」という形になつて現れたと考えると、むしろ「不登校ができた」ことを祝福すべきであろうが、できうるならばことさらエネルギーを必要とする「不登校」にはならない方が楽に生きられるというものである。

いずれにし

ても筆者らは不登校児の共通した成育歴から得られた「教訓」を、できうるなら



ば多くの子どもたちに対し、いわば「予防的に」生かすことができないものかと考えたのである。

従つて当時、様々な書物に、あるいは様々な場で以上のことがらを伝えたものである。その結果、多くの親御さんたちから「家の子は兄弟喧嘩が絶えませんから自我の育ちは順調」ということですね。ですから不登校にはなりませんね」「家の子は我が儘で何でも欲しがり、買ってもらうまで納得しません。ということは自我が育っているということですね」

等々の質問を受けた。このことは我々の主張に対して極めて大きな「落とし穴」があることを示唆していたのである。

先の文部省の「子どもの体験活動等に関する国際比較調査」の結果を見て、実は前述した筆者らの「登校拒否の発生機序について」の論文を思い出したのである。まさに「不登校児にしないための」条件を満たしていた結果だったからである。つまり

「外的適応」を「目の敵」にし、ことさらに「いい子でない子」に仕立て上げている関わりが見えてくるのである。「弱いものいじめ」をしても「嘘」をついても「友だちと仲良く」しなくとも「友だちとの約束を破つて」も「校則を破つて」も、それはむしろ「良い育ち」の証と考えたのだと思われる。これららの推測が当たつているとすれば、筆者ら、当時のいわゆる「子育ての専門家」の責任は計り知れないものがあつたといえる。

「不登校児にしない子育て」 という発想の大きな落とし穴

「大きな落とし穴」には二つの問題点があり、一つには子育てにとつて例え善意から出発したものであつても「させないよつに」「～にならないように」という、いわば予防的姿勢は意図的かつ操作的であるということである。例え保護されるべき幼い

存在であつても、子どもは親とは別個の一つの人格を備えた存在であり、親が最大限子どもに歩み寄つて、子どもの立場に立とうとしても立ちきれるものではない。「帶に短したすきに長し」である。周囲からの操作さえなれば、誰しも子どもであろうと自分にとつて最も相応しい選択・決定をするものである。勿論放りっぱなしはまずい。放るのではなく、その時々の子どもの感覚を最大限尊重し、信頼し、見守る中で、結果的に子どもにとつて好ましくない選択をしたときは自ら気づいて自ら建て直すのを、また見守ればよいのである、というより、そうするしかない。その際、子どもは親から信頼され見守られているその目を支えに、自分にとつてよりよい選択・決定を目指して試行錯誤を繰り返すことができる。

その際重要なことは、親にとつてギリギリ受け入れられないところでは、きちつと「枠」つまり限界

を示すことである。これこそ子どもにとつて真の安全感につながる。大きな枠の中で安心して思い切り羽ばたけるからである。いい加減な気持ちで与える「枠」は役にたたないどころか親に対する信頼を失う。その時々の心から思い、「本気」のかかわりは必ず子どもの心に届くはずである。「前もって」とか「できる」とならといった対応は決して響かない。その時々の真剣な眼差しによる「守り」と「枠」こそが「いざ」となったときの守りを確信できて子どもを解放するのである。

そう考えると、先にも述べたように「不登校」は親や世間は困惑するが、子どもにとつてはそうすることとでそれ以上辛い状況を続けることに終止符を打つたわけであり、極めて好ましいことと評価することができる。「不登校」をあつてはならないこと、何としてでも避けなければならぬことと考えて、「登校刺激」も含めて周囲から絶え間なく軌道修正

を行つていくと、自分で自分の人生に責任をもてなくなる。辛い選択・決定でも自らの判断であえてそれを選択したということは、自分にとつて少しでも良い状況に向けて自力で自分自身を軌道修正する「力」があつたということの証である。

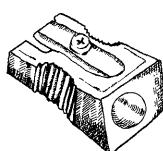
「不登校」さえもできなかつた子どもはやがて力尽きて、自らの「身体」を滅ぼしたり自らの「精神」を滅ぼすことにもなりかねない。決して「不登校」を礼賛するわけではない。できうることなら不登校にならないで済ませられた方が生きていくのは「楽」だったはずである。「不登校」は子どもが積極的に意図的に選択・決定した行為とは言えず、結果的にそうなつてしまつた方が当たつている。すなわちストレートな自己表現つまり「表メッセージ」ではなく、いわば「裏メッセージ」に頼らざるえなくなつた姿と言わざるをえない。しかし、自分自身の「建て直し」に向けて他からの働きかけ

によるのではなくて、自らの意思で一步前に進み始めたことは飛躍である。

二つ目には例え「～しよう」と思ったとしても、実際にその

ように行動できるものではない。我が身を意識的にコントロールすることは所詮無理なことであり、本來の自らの身体が感じる「思い」と知的に考えている「意識」との間のギャップ、すなわち「自己」不一致感は、本人にとつて我が身が引き裂かれる思いであるはずであり、本人の感じとしては不快感・不全感を感じているはずである。

従つて、そのような自己不一致の状況にある大人に関わられたとき子どもはどのように感じるだろうか？受け手である子どもからすれば極めて不自然ということになる。不自然であれば納得はいかない。結局、親に対する不信感を招くことになる。



頭で考えた「知」は説得力を欠くし、第一長続きしない。結局そうしかできないようにしかできないのである。「必然」の結果は謙虚に受け止めるしかない。心からの思い、すなわち「本気」であることは子どもに対して強い説得力をもつものである。

おわりに

現代の日本の親たちの子どもに対する態度が諸外国に比していい加減であるという調査結果が発表されたが、いい加減というより、親たちの子育てに対する不安の現れという印象をもつた。戦前から戦

的、そして操作的な親の姿が浮かび上がってくる。それには筆者をも含めた我々子育ての「専門家」の責任は厳しく問われなければならないが、だからこそ声を大にして言いたいのが、もつと「当たり前の」感覚を大切にし、それぞれの親の思いで「イヤなものはイヤ」「ダメなものはダメ」と「本気」で「まとも」に子どもと向き合っていくことである。親も含めて大人が「本気」でないのに、どうして子どもだけ「まとも」になれるだろうか。

(津田塾大学ウェルネスセンター)

註

〔登校拒否の発生機序について〕『小児の精神と神経』第十五巻、第二号、第三号（一九七五年）

ジももてないまま、子どもの状況は今まで見られなかつた様々な搖らぎを示している中で、取り敢えず戦前の頑固な親はいけない、不登校を生み出す親の関わりはしないでおこう等、極めて刹那的、短絡



私が幼児教育を志した頃(8)

津守 真

青年期の自我の形成を振り返つて

私は幸いに青年期に偉大な人々に出会った。戦争の時代をくぐり抜け、靈性をもつて生きた先輩たちである。その中には、矢内原忠雄、南原繁、藤井武などがある。

南原繁は、私の大学生時代の東大総長である。式典のたびに行われた南原総長の演説に私は欠かさず出席したが、昭和二十三年九月の私の卒業式の演説では「人間の使命」と題して、人間の存在を律する「精神」について述べられた。それから何十年も経た後に、私が子どもの発達における自我論を考えたのも、精神というこのときの南原先生の考えが基底にあったのかと思つ。

この日の南原先生の演説は、南原繁『真理の闘ひ』（東大総合研究会出版部昭和二一



十四年刊）に掲載されているので、それを参考しながら次に述べたい。

「終戦後三年、大学卒業期も漸く平常に復し……戦時中動員された学生のうち、遅れて帰還した人々を加えて、ささやかながらこの場所に、戦争の名残の本学最後の九月卒業式を挙げるに至つたのである。」

「われわれはひとり外的権力や圧迫から自由であるというだけではなく、何よりも『自己自身』に於いて自由でなければならぬ」と南原総長が語り始められたとき、私は三年前に軍隊から解放されたときの自由な空気を思い起した。南原はそこにどどまらず、更に『自己自身』における自由を指摘した。それは外的環境の変動に左右されない内面の自由である。前者の自由は時がたつうちに再び現実の不自由にからめとられてゆくが、後者の自由は、常に変動する現実の状況を越えたところではたらく「精神」である。

南原の演説は更につづいて次のように言う。「人間が政治的存在であると共に、それ自身一個の道徳的精神的実在であり、そのことは、変わりゆく一定の時代の政治的形態や社会様式によって、少しもその重要性を減じないところの人間の特質であり、尊厳である。何故ならば人格はその本質において精神であつて、この精神が人間の全體的存在を規律しなくなるとき、人間はもはや自らの統一と平衡を保ち得ないからである。それはついに人格そのものの破滅に導かずにはおかぬ。」（傍線筆者）



ここには政治学者をこえた南原の人間論がある。私はそれから数十年を経て、子どもの経験を組織化し調整する自我の機能を考えてきた。乳幼児期から各発達の段階で、危機に立つごとに自我は強められ、成人に至るのが自我の形成である。老年になつて、過去から未来の全体を見直すとき、マイナスとプラスの両方を含めて経験の全体を肯定的に見直すことができるときに、人の自我はそれにふさわしく全うされるのではないだろうか。それは人を責め、自分を責める道德的反省によつてはなし得られない。「ゆるし」によつてはじめて可能になる。この作業は老年だけのことではなく、若いときから始まつて日々繰り返されている。それは人間の日々の営みであるが、究極的には宗教に至る。

南原は内村鑑三の愛弟子であつた。私はこの時期、内村鑑三全集、藤井武全集を耽読していく、南原の講演に深くうなずいた。

*

私は自分の生い立ちをキリスト教なしに考えることはできない。私が小さいときから、私の家にはキリスト教の牧師たちが何人も出入りしていた。小学生のときに私の家庭集会に話に来られた三井芳太郎先生は、大井町の靴屋の地下室で鉄道省のキリスト教信者のための集会をもつておられた。私も二、三度行つたことがあるが、



ローマの初代教会のカタコンベのような薄暗い小さな部屋だった。真に立派なクリスチヤンだったのだろうが、すでに老齢の先生は、はずれそうになる鼻眼鏡の下で口をもぐもぐ動かして定かでない発音で話されたので、私と妹はおかしさをこらえるのに懸命だった。

私の父の書斎には、父が若いときアメリカに行つたときに求めた大量の英語の聖書の注解書、説教集などと共に、内村鑑三、植村正久、上村邦良、藤井武などの書物が書棚の中央を占めており、私は少年の頃からキリスト教の書物に親しんでいた。私の父の家系は昔から神道の神職であるというが、父は若いときに東京に出て無線電信技師になって以来、キリスト教精神によつて近代的な家庭を築こうとしていた。

内村鑑三の柏木の聖書講義には父母ともに熱心に通い、南原繁、矢内原忠雄、藤井武のことなどを尊敬をもつてしばしば語っていた。ここで私は、たとえ人が師をどんなに尊敬しようとも、師も友もそれぞれ絶対者の前にひとりで立つ人格であるということを付け加えておかねばならない。

*

青年の日に私が心を動かされたもう一人の人にアルベルト・シュヴァイツァーがある。



南原総長は、この日の演説の終わりに戦争直後の日本の現状を見つめて、シユヴァイツァーに言及された。

「現代が直面する経済的・社会的困窮と破局は惨めなものがある……これに立ち向かうには、政治的・社会的組織のみでは不可能である。内面的に自由を確立すべく努力すること、そしてその自己を、自分もその中に在る世界と同胞のために生きること、すなわち、人生と社会のいかなる領域の中にも、眞の人間性と自由を回復する力を必要とする。現代人類大衆の間に欠けているのはそうした精神と人格の力である。」「他日講和が成立し、日本が世界にひろく交通を許される暁」に、それぞれの職場において各自が人間としての使命を果たすよう訴えた。昭和二十三年は、未だ日本と世界の国々との間に講和条約は締結されていなかった。シユヴァイツァーは、ドイツで神学、哲学を修めて後、アフリカに一生を獻げようと、医学を修め、一九一三年にアフリカに行つた。ヨーロッパ人のこれまでこの大陸と黒人にたいして犯した罪科を償おうというのが動機であった。南原は、「それは自己に絶えず内面的に深化し向上せしめると同時に、他人の運命に働きかけ、世界の苦惱を自らの苦惱として戦うところの深い倫理的宗教的な動機から出た行為である。」と言う。そしてあえて世界と言わず、敗戦日本の荒廃した地方と同胞の間になすべき仕事は夥しくあることを語つた。

ずっと後になつて、私はアフリカでシユヴァイツァーのもとで働いた人から話を幾



度か聞く機会があった。現代のアフリカはシュヴァイツァーの時代のような暗黒大陸ではない。社会、政治状況は著しく変化している。シュヴァイツァーの病院は近代的医療機関としては批判されるべきものもあり、長年の間には彼の人間的弱点も表面にあらわれて、理想を求めて彼のもとを訪れた人々を失望させたという。このことは彼の病院だけのことではない。社会の変化の中でどこにも生じる、ひとつの組織の変遷の歴史でもある。だからと言つて、このことは、ひとりの人間が生涯の出発点において、時代が迫つた倫理的必要に答えて身を挺して戦つた人々の人生の価値を低めるものではないだろう。

特別保育室開設前夜——障碍をもつ幼児との出会い

卒業後間もなく、私は障礙をもつ幼児（当時は精神薄弱児と呼んでいた）と出会いうことになった。そのことが私の生涯の大きな部分を占めることとなつたので、次にそのことについて述べたい。

大学在学中から愛育研究所出入りしていた私は、卒業後は無給研究員となつて、新生児室や乳児室に通つた。昭和二十四年に教養部長が山下俊郎先生から牛島義友先生に代わり、その頃はまだ珍しかつた児童相談が始まつた。竹田俊雄先生が主任で、森脇要、星野近子その他の方々が参加しておられた。波多野勤子さんが客員で来てお



られたこともある。私は牛島義友、森脇要、木田市治らが昭和十三年に作成された愛育研究所乳幼児精神発達検査をする役だった。

昭和二十四年四月のある日、双子の幼児を連れて相談に来られたひとりの母親がいた。私はいつものように、乳幼児精神発達検査をした。黙つてうつむいたまま何もせず、検査不能だったが、発達指数は四十位と推定し、母親に伝え、大きくなつても普通の能力の四十パーセント位のままだらうと述べた。その母親は直ちに、「そんなことは分かつています。この子たちが通える幼稚園を教えてほしいのです」と言つて帰ろうとした。その頃の日本は、出産率が急増し、幼稚園も小学校も、一学級五十人というところも珍しくなかつた。午前午後の二部制を実施していて、知恵遅れの子どもはどこでも入園を断られた。母親はそのことも分かつっていた。私共が話していく小さな部屋には西陽が射していたが、次第に暮れゆく夕闇の中で私は困惑していた。あの日の相談室の様子を私は忘ることができない。次回までに相談しておくと言ふと、漸く母親は腰をあげた。翌日、教養部長室での昼食のときに、私はこの話をした。教養部長の牛島義友先生は、直ちに、必要なことならやればいいと言つて、昭和十三年に愛育研究所創設時から「異常児保育室」が設置されて、三木安正がそれを担当していたことを話された。保育室は研究所一階の突き当たりの部屋で、創設当初から一方視の観察窓がついていた。保育室側が白色の絹地、観察側には黒色の粗い目



の布が張られている立派な観察室であった。いま考へても幼児用の部屋としては最高の部屋だった。一隅には大きなドルハウスがあり、応接間、食堂、トイレまでついて、暗緑色の屋根の魅力的な人形の家だった。皇太子殿下（現天皇）御降誕記念に御下賜のものだという。戦時中、三木安正は保育問題研究会に熱心だったことから警察に睨まれて何ヵ月も留置所に入れられ、岡部弥太郎先生が釈放に尽力されたことも聞いた。空襲の激化と共に「異常児保育室」は閉鎖された。

戦後昭和二十三年より、その保育室は幼稚園に使われていた。牛島先生は三階の先生の研究室を開設するから異常児保育室を再開するようにと言わされた。一ヵ月の研究期間を与えられて、私がそれを担当することになった。

私はまず、三木安正を千葉の自宅に訪ね、病床にあった先生の枕元で話を聞いた。当時東京都内には、神竜小学校、大和田小学校他、数校の特殊学級があるだけだった。精神薄弱児施設としては滝野川学園があつた。それらを訪問する計画を立て、また、イタール、セガン、デクードル、コルヴィヌスなどを読み始めた。

私は異常児保育室という名称が気に入らず特別保育室と呼んだ。これは間もなく家庭指導グループと更に名前を改めた。その申し込み書をガリ版刷りにした。

この子どもたちのことに関心をもつて研究しているのは、本当に一握りの人達だった。

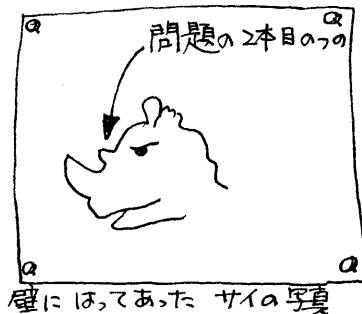
目をこらして (3)



「サイのお面を作つて」とU君にせがまれ、サイには自信がなかつたのだけれど、U君の熱心さに負けて作つてみた。できあがるとU君はつてもうれしそうにそれをかぶる。「ぼくは、サイのサムソン君!」と言つてM君と一緒に遊戯室へと走つていつた。喜んでくれてよかつたと思いながら少し遅れて遊戯室に行くと、後ろの壁に貼つてあつたサイの大きな写真(下図)の前に二人は立つていた。「あら、こんなところにサイの写真!」と思ひながら私も近付いた。U君は、M君に自分のお面を見せながら、「これが○○で」という風に写真のサイとお面のサイとを照らし合わせていつた。すると、急にU君の動きが止まつてしまつた。

違う部分があつたのだ。U君はお面の☆印の部分を指でなぞりつつ「ここに、つのがもう一本あるんだつたんだね」と小さくつぶやいた。どうなるのかな、と思ひ私は黙つて見ていた。

少しして「まだ若いサイなの。つのはこれからはえてくるところなんだ!」U君はそう言い、二人は笑い合いながら駆け出していく。あとに残つた私は、心がポツと温かくなつた。





耳をすまひて

-2月、保育園の誕生会で-



○○だから□□と子どもが考
えるのはどんな時？どんな風
に？だって！とムキになつて考
えたり、想像をめぐらして思
ついたり、ともあれ、子どもの
考えに心ひかれ歩みをとめる。

この話の展開は何？と、仕事に疲れた私も思わず疑問を覚え
て「何故？」と聞き返した。すると勢いよく説明が始まった。
「だってね、今日ね、一月の誕生会があつたんだよ。ずっとずつ
とね、まだかな、自分の番はまだかな、つて待つてた大ちゃん
がね、今日ね、風邪ひいて休んじゃつたんだよ、かわいそうで
しょ！冬は風邪ひくもん。夏に生まれたほうがいいよ」。

娘は三月生まれ。待つても待つても誕生日が来ないと言つて、
よく嘆いていた。二月のある日、保育園からの帰り道、娘はいつ
も以上に確信をもつて話し始めた。「やつぱりね、三月生まれ
はよくないよ。だってね、冬は風邪をひくでしょ」「？」。



(目黒区立ふどう幼稚園)
絵と文 宮里暁美

宝探しのお仕事

山岸 幸子



私の仕事は「微生物産物からの創薬スクリーニング」です、と言わざるも、皆さんにはイメージが浮かばないのでは? と思います。"微生物産物"というのは、カビや細菌などを数々の栄養源とともに培養して作られる物質です。カビや細菌というと、お風呂に生えるカビ、パンやお餅に生えるカビや、風邪などの病気の原因など、よくないイメージがありますが、実は、私たちの生活に

有用な物質を作り出してくれています。チーズ・ヨーグルト・納豆などの発酵食品はカビや細菌によって作られますし、私の関わっている薬の世界でも、抗生物質・抗がん剤・免疫抑制剤・高脂血症治療剤など、微生物が作る薬がたくさんの人の命を救っているのです。そして、微生物の作る薬は、人には思いつかないような、あるいは合成的に作るのが難しいユニークな構造をしています。

特集〈みる〉

このような微生物の持つている可能性に魅せられて、入社以来十数年、微生物産物からの薬の種探しにはまっています。

そう、薬の種探し、これが“創薬スクリーニング”です。スクリーニングとは病気のモデルをつくり、その病気（あるいはその原因）を抑える物質を探すことです。一年間に数万—数十万検体のサンプルをそのモデルで調べます。微生物の培養サンプルはたくさんの物質の混合物であり（ほんとうにドロドロしています）、その中に入っているたった一つの有用な薬になる可能性のある物質を見つけ出す、まさに“宝探し”的な仕事です。

では、どのように宝探しをしていくか、お話ししましょう。

まず最初に、どんな宝を探すか（テーマ）を決めます。どんな病気を標的にするか、どんな作用を持つ物質を探すかは、医療現場のニーズ（こん

な薬がほしいというお医者さんや患者さんの要求）、市場性（採算が取れるか）、他社の開発状況など多面的な分析を行い、決定されます。常に広い視野を持ち、さまざまな情報にアンテナをはつて、情報に対する感度をあげることがテーマ探しには重要と考えています。

次に、具体的な宝探しの方法（モデル）を作成します。宝探しの方法にはいろいろな方法があります。古典的な方法としては、カビや細菌が生きるか死ぬかで数多くの抗生物質が、ヒトや動物の細胞を用いて抗がん剤などが発見されてきました。その他にも、組織から病気の原因となる酵素やレセプターを取り出して、それに対する作用を指標に見つけられた薬もあります。遺伝子工学が発展した現在では遺伝子の発現を指標としたモデルも数多く取り入れられています。最初はたくさんのサンプルを調べるため、このような小さいスケールの *in vitro*（試験管内）モデルが用いられま

す。そして、スクリーニングによつて選ばれた物質（宝）だけが、*in vivo*病態モデル（薬としての作用が動物レベルでもあるかどうかを調べる試験）へと進めるのです。

モデルができると、やつと宝探し（スクリーニング）が始まります。

以前は、まさに宝探しの（）とく、一つ一つのサンプルを私たち人間が検定をしていました。自ら手を動かし実験をし、自分の目で観察し、求める作用を持つ種をコツコツ探していました。例えば、抗生物質のスクリーニングは細菌をうえつけたシャーレに、サンプルをのせて培養し、細菌が増えないとできる抗菌リング（まるく抜ける）ができるかを指標に、目で観察してサンプルを選びだします。また、ある薬が丸い形の細胞を細長く変化させる作用を持つとします。その薬と同じ作用を持つ物質を探すために、その丸い細胞にサンプルを加えて、顕微鏡下で細長く変化するかを観

察してサンプルを選択します。私は、今までこのような細胞を用いた多数のモデルで、宝探しをしてきました。ご存知のとおり、すべての生物は細胞から出来ています。小学校のときにタマネギの表皮の細胞を顕微鏡で見た経験が、皆さんにもおありでしよう。私はその時の新鮮な驚きを今でも覚えています。

今では、細胞の顔を見て、細胞のご機嫌とりをしています。毎日細胞を観察していると調子のいいとき、悪いときがはつきりわかります。これらの細胞にサンプルを加えると、さらに表情が変わつてきます。丸くなつたり、足を伸ばしたり、影が薄くなつたり……。それを見て、私たちは「これは狙つている薬と同じ作用をもつていて」とか、「これは細胞に対するある種の毒物だ」とか、「これはこの前見つけた物質と同じだ」とか判断します。さきほども書きましたが、微生物の培養サンプルはたくさんの物質の混合物であり、

特集〈みる〉

サンプルの示す性質は一つの物質によるものではありません。顕微鏡で見る世界にはこのように複雑な情報が盛り込まれています。そして、これらの人目の見る情報や経験が、宝探しの決め手となります。

そんな、宝探しの世界にも、大きな変化が訪れています。最近はロボットが人の代わりにスクリーニングをする時代になつてきました。全自动のスクリーニングロボットなどが開発され、昼夜を問わず、たくさんのサンプルを検定できるようになりました。その速さと正確さには目を見張るものがありますが、得られる結果は一つの指標で、一つの数字として出できます。その一つの数字も複雑な現象の一面を表しているのですが、パソコンで画像処理をしていると実感するようになります。今まで見る情報の方がはるかに情報の量が多いのは明らかです。今後、私たちはロボットの能力をうまく引き出し省力化しながら、人が得意な観察力を

にますます磨きをかけて、効率的に宝探しをしていきたいと思っています。

しかしながら、見つけられた宝（薬の種）が本当の薬になるためには、まだまだ高いハードルが待っています。薬になるために必要な薬効、安全性、代謝安定性などの多くの試練を経て、はじめて患者さんに使われようになります。私たちが見つけた宝が本当の薬になる確立はとても低く、時間も十年近くかかる、非常に気の長い、難しい仕事です。しかし、「自分の発見した薬で病気を治す」という大きな夢に向かって、多くの仲間たちと頑張っています。

このように、宝（薬の種）を探す仕事には、テーマ探しに必要な大きな視野と、自らの目を使つた鋭い観察力が必要です。二十世紀もあとわずか。今日も顕微鏡でミクロの世界を眺めながら、「世紀の大発見」という大きな夢を見ている私です。

看 る

高橋たか子

私は精神科に勤務している看護婦です。看護学

ます。

生の実習も受け入れているので、その指導にも当たっています。その中から患者さんを見るということについて日頃行っていることや感じていることを書きます。

しかし精神科では、疾患について学ぶ以上に、患者さんの健康面（正常な所）に着目して実習するところに違いがあります。

学生は一人の患者さんを受け持ち情報収集→看護計画立案→実施→評価のプロセスで実習を行います。普通、内科、外科等他の科では、患者さんの疾患について処置、技術的な部分も含め実習します。学生が受け持つケースは、慢性期の場合が多く、妄想、幻聴、自我障害等、陰性症状としては、感情鈍麻、意欲減退、無為自閉等があります。学生が受け持つケースは、慢性期の場合が多いため、多少個人差はありますが、前記症状が著

特集〈みる〉

明に表れず安定しているといえます。

計画を立てて実施するにはまずコミュニケーションが大事になります。

《コミュニケーションの技法》

1 気持ちの受け入れ

看護者の価値観や社会的道徳などをおしつけない。

患者さんの気持ちを受け入れる。

2 倾聴と感情の表現

看護者が聞き手となり感情の表出を促す。

3 雰囲気

言葉づかいは明確に、親しみのもてる言葉を選び気楽な気分で話せるような雰囲気をつくる。

4 共感的な態度

患者さんの立場を受け入れ患者さんの立場で感じ考え患者さんの直面している問題に理解を示す。共感的態度をもつ。

5 内面の心の状態

コミュニケーションの場面で観察された患者さんの外見的な態度、表情などが、内面の心の状態とどう関連しているかを考え理解しようとなめること。

る。

この外にも、実際の看護状況を振り返る為にプロセスレコード（再構成）を利用します。

《プロセスレコード》

①私が見たり聞いたこと（私が知覚したこと）

と

②私が考えたり感じたりしたこと

③私の言動

④考察

①～④のようにその時のコミュニケーション場面を再構成し、ロールプレイングを実施し学生同士で再現します。そうすることにより、自分の傾向（考え方）、特徴に気



づきふりかえることができ、有効な人間関係のあり方を考え、相手の気持ちを思い、どうすれば良かったかまで学ぶことができます。

学生たちはこのように、情報収集→看護計画立案→実施→評価、コミュニケーション技法、プロセスレコード検討、を実施することで精神科を学んで行きます。

しかし時々患者さんとコミュニケーションがとれず拒否されるケースもあります。概ね、患者さんが方が学生に合わせて対応してくれるケースが多いのですが、時にはストレートにいやな態度を示し、「出ていって！」と拒否する患者さんもいるので学生たちは悩みます。

その場合、自分本意で都合を押しつけていかつたか？ 患者さんの都合や考え方を無視していなかつたか？ 計画の押しつけになつていなかつたか？ 患者さんのやさしさ、心遣いに気づいていたか等ふりかえつてもらいます。

もう一つの大事な看護として「見守る看護」というものがあります。私たちが学生の指導に使っている言葉です。看護の「看」（見る）には「付き添つて見守る」の意味もありますが、『患者さんとの距離を持つこと。しかし何か不都合があれば、いつでも看護婦は来てくれるという安心感をもつてもらう看護』という意味です。

一定の距離を持ち患者さんのペースをくずさないこと。意志を尊重すること。その上で看護を開することが必要となるわけです。

以上、学生を通してみた精神科看護の一部を書きました。

これは、人間関係の中でごくあたりまえのことです普通に行っていることだと思います。

つい自分のことばかり考えてしまいかですが、相手の気持ちを思いやること、相手の立場に立つて考えることは忘れてはいけないことだと思います。

特集〈みる〉

家族にも同様のことが言えるのではないでしょ
うか？

これは、プロセス検討によく出てくることで
すが、

・相手の思っていることは聞いてみないとわから
ない

・こちらの思いも話さなければ伝わらない。

・相手の表情、しぐさも大切に受けとめる必要が
ある。

家族だって、きちんと話し合わなければ理解し
あうことは難しいし、子どもでもきちんと状況を
説明することにより安心する場合も多くあると思
います。

できるだけ夫との会話を持ち、お互いの考えを
伝える。子どもたちとも十分話せる時間を持つ。

時には家族の中でも距離を持ち相手のペースを
崩さず、意志を尊重する。安心感を与える、見守
る、とかなり共通するところがあると感じていま
す。

す。

しかし、わかっていても現実はなかなか難し
く、私事ですが疲れている時にはゆっくり話を聞
くどころか、イライラをぶつける対象になりかね
ません。感情にストップがかかればいいのです
が、そもそもいかない時もあり、私だって人間、
“そういう時もあるさ！”と開き直ってしまうこ
ともあります（苦笑）。

なかなか家族となると仕事のようにいかず、む
ずかしい場合もあります。後からフォローを考え
たり、仕方なかつたよねと自分を慰めたりしてい
ます。

まだまだ「看る」ことができるには、仕事の実
績の他にも人生経験も必要かな？ と感じていま
す。

（精神科看護婦）

「見られる子ども」、「見せる子ども」

「見せる子ども」

井口 真美

当然のことながら、「見る」という行動は、「見る」対象を伴います。保育においては、その対象として子どもがいるわけです。

象であるはずの子どもの気持ちを置いてきぼりにしたりすることがあるのです。

見られる子ども

ところが、残念ながら、子どもを一生懸命「見てる」つもりでも、その一生懸命さが裏目に出てしまったり、「こうあつてほしい」といった一方的な価値観だけで子どもを「見て」しまい、対

子どもたちが遊んでいる様子を、少し離れた場所から、笑みをたたえながらじっと見守る保育者……その視線の先には、友達と楽しくあそぶ子ど

特集〈みる〉

もの姿があります。

こんな時の保育者の視線は温かく、子どももその“温かい温度”を感じ取りながら安心して遊びを進めていることでしょう。

しかし、時に、私が出しやばって手出し口出し

したくはないが、ちょっと様子は見守りたいなど感じる場面があります。例えば、友達と一緒に遊んでいるものの何となく不穏なムードが漂っているAちゃんたち、メンバー同士の友達関係がまだ不安定なために遊びが途絶えてしまうかもしれないBちゃんたち、友達と口喧嘩をしてしまい「一人で遊ぶからいいの」と所在なげに絵を描いているCちゃん、等々の姿です。

こんな時、気がつかないうちに私は、不安そうな“温度の低い”視線を子どもたちに送っているに違いありません。すると、子どももその視線が気になり、ちらちら私の方を見たり、遊びが盛り上がりなくなったりするものなのです。

そこで、“温度の低い”視線を送らなければならぬ時は、子どもをダイレクトに見つめるではなく、見ていないふりをして、子どもに“温度の低さ”を感じ取らせないように心がけてみました。

気になるAちゃんたちにあえて背を向け、散らかっている遊具棚の整理をしながらAちゃんたちの会話を背中で聞いたり、隣のグループの遊びに加わりながら横目でAちゃんたちの様子をそつとうかがつたり……、とまるでスペイマガいの行動をとつてみるのです。

子どもの姿を細かく見どることは保育者としての基本です。

しかし、保育者として未熟な私などは、「細かく見とりたい」との思いが全面に出過ぎてしまい失敗した経験が数



知れず。「好きな相手を追えば逃げる」という恋愛指南ではないですが、保育における「見る」という行動一つをとつてみても、こちらの思いが強ければ強いほど、「見られる」子どもの立場をふまえ、その表現の仕方にはよくよく注意を払わなければいけないと実感しています。

見せる子ども

鉄棒で前回りが初めてできるようになった日、子どもは「先生、見て、見て」と、保育者の手を強く引っ張つて鉄棒に連れていき、前回りをして見せてくれます。前回りができる感動や頑張った達成感を保育者と一緒に分かち合うことで、子どもも喜びは二倍になります。“見せる喜び”を味わった子どもとそれに共感する保育者は、ほのぼのとしたひとときを過ごすことででしょう。

私の幼稚園では、学期末や年度末に、今までの生活のまとめとして、五歳児が四歳児や保護者を

招いて劇などの活動をして「見せる」ことがあります。五歳児ともなれば、四歳児に自分たちの劇を見てほしい、お母さん方に劇を見せたいと思う気持ちは自然に生まれてくるものでしょうし、それをきっかけにして発表の場をもつことは、五歳児にとって貴重な経験になると思います。

ここまでいいのですが、この「見せる」活動がなかなかくせ者でして、とりわけ、保護者が「見せる」となると、(要らぬ)教師根性がむくむくと首をもたげてることがあるのです。

“自分がなりきる楽しさ”を大切にしつつ、“他人に見せる喜び”を併せ持つた活動（劇など）を展開させていくためには、発表の時期や活動の内容、進め方について十分な配慮が必要です。そうでないと、せつかくの活動も、子どもの主体性がそがれたお仕着せの活動になってしまします。

私は、かつてこんな失敗をしたことがあります。

特集〈みる〉

ある学年の一学期、私の担任する五歳児クラスでは、お姫様、妖精、ポケモン等、思い思いのものになりきって遊ぶ日々が続いており、次第に劇場ごっこなるものも生まれてきました。それは「自分がなりきる楽しさ」だけでなく、「他者に見せる喜び」をも味わいたいとの思いの自然な表れでした。

その後、子どもたちとの話し合いで、保護者を招いてクラスで劇をすることに決まりました。

しかし、劇の練習をしていくうちに、「せつかく保護者の方々に見せるのだから、見場もよくしたい」と私の思いが、「見せる」ことを強く意識した劇の指導へと形を変えてしまったのです。

イヌになりきって動き回っている子に向かって「お客様に、お顔を見せようよ」と言ったり、泥棒を捕まえようと走り回る子に「そんなに騒いぢや劇にならないわよ」と注意してしまつたり

……そこには保護者が子どもを「見る」目（＝おとなの一方向的な価値観）を意識し過ぎ、見場をよくすることに気をとられていました。いつの間にか、子どもが“なりきる楽しさ”を隅へ追いやり、子どもの「見せたい」との当初の思いを削いでしまったのではないかと深く反省しています。

*

子どもは、おとなたちの視線を敏感に感じ取るもの。そして同時に、おとなたちが自分をどう見ているかについてもまた、敏感にかぎ分けてしまいます。

子どもの気持ちを考えず、一方的な期待や評価で子どもを見てしまうと、子どもはおとなの枠組みでがんじがらめになってしまい可能性があることを忘れずに保育をしたいと考えています。

（東京学芸大学教育学部附属幼稚園竹早園舎）

み

る

中島ふじ子



子どもにとつて「みる」とは、どんなことか。

この世に生まれて、真っ先に目に入ったのは何だつたのだろう。

ひよこなら初めて目にしたものを見ると慕う、いわゆる『刷り込み』がプログラミングされているということは小学生だって知っている。それでは、人間はどうかといえば、現代の出産シーンで

最初に目にするものが必ずしも母親であるとは限らない。であるのに子どもはきちんと親を認識し育つものであるし、間違つても取り上げた助産婦さんについていくなどという事態は起ららない。

生まれてから一年近くも自分で歩くことは困難であるし、こんなに手のかかる動物は他には例を見ない。哺乳類の中では、一番進化した動物である

特集〈みる〉

はずなのに、自分で餌を捕ることもできず、すばやい動きで敵をかわすでもなく、ただただ周りの保護者に依存して育つ。そしてそれはおよそ二十年近く続くらしい。最も、保護者側の事情で何らかの変化がある場合、第三者がそれを肩代わりすることはあっても、世界中のどの国と比べても日本は子どもを大事にしている、と言つたら言い過ぎだらうか。

まず、空腹あるいは衛生面の問題で大人になる前に死んでしまう子がない。経済的な差はあるとも、とりあえず食べることに窮して餓死することはない。そして、どの子も学校に行くことができる。家庭の事情で義務教育を受けられない子はない。子どもにとつてこんなに暮らしやすい国はないはずである。

それなのに、親からの虐待で命を落とす子がいる。食事を与えない、風呂に入れないと戸外に放置する、暴力で瀕死の重傷を負わす。

いつたい、その親はどんな育ち方をしたのかと思う。食べ物が約束され、住むところ、着るもの、学校……。おそらく当たり前のように与えられ、疑うことも無くなることすら考えずに大人になり、親となつてしまつたのではないか。

「感謝の気持ち」などというと、仰々しいと嫌がられるかもしれないが、衣食住に困らない幸せ、教育を受けられる幸せを一度でも考えたことがあるだろうか。あまりにも当たり前なこととして雑に生きてはいられないだろうか。

虐待を受けている子どもは、ひと目でわかるといふ。以前、娘の友達でそれらしき子がいたのが思い出される。突然転校してしまい、消息を絶つていたが、去年の夏祭りで五年ぶりに見かけた。五年の歳月で、彼女を取り巻く環境が改善されたのか、ずいぶん表情が明るくなつていて、ほつとした。当時は、風呂にも入らず、目線がしょっちゅう泳ぎ、夏も冬も同じピンクのワンピース姿

だつた。物凄い早口で落ち着きが無く、嘘ばかり言つていた。そして、絶えず大人の動向を探つていた。

「コノヒトハイイヒト？ ワタシヲブツ？」

大人を見る子どもの目。愛情に包まれ、しつかりと自己表現できる子とそうでない子とでは、かなり差があるようだ。後者は自己防衛のために嘘をつき、鎧を着る。大人を寄せ付けない、それで悲しいほど疑り深い。目に見えないシャッターが下りている。

「みる」から児童虐待にスライドしてしまつた。この見えないシャッターを持つ子が増えってきた、と感じるこの頃……。

私が親となり、子育てをしているうち「子ども劇場」というものに出会つた。漫然とTVから垂れ流しにされる雑多な情報に危機感を覚え、「子どもの文化は、親子で自ら選び創ろう」という『げきじょう運動』である。当時、長男を幼稚園

に入れ、長女を出産したばかりで精神的にも余裕がなかつたはずなのに、「親子で生の舞台を見る」ことに何の抵抗もなかつた、というより、こんなに飢えていたのだ……とうれしかつた。会場のシートに埋もれるようにして座つていただいさな息子が、舞台に引き込まれるように、食い入るよううに観てゐる、というのも驚きだつた。娘は泣きもせず、おとなしく抱かれてゐるか、保育室で眠つてゐた。数々の印象深い演目がある中、どの回も違つた感動を受け、幼かつた子どもたちも高校生・中学生になつた。その間、キャンプに行つたり、バザーに出店したり、子ども新聞を作つたり、さまざまな体験をしてきた。

子ども劇場には、年に五、六回の観劇の他、野外活動や異年齢や仲間づくりなど多彩なプログラムがある。たいがいは子どもの年齢が上がつてくるにつれ、いつしか卒業していくものであるのだが、我が子たちは一向に「辞める」と言わない。

特集〈みる〉

特に上の子など、部活が忙しくて年に一・二回しか観られないのだが、それでも「もしかして、行けるかもしれない」と思っている。地域の子ども会・学校などでは限られた人間関係だが、近隣の学校の違う友達や異年齢の関わりを通して、子どもたちは交友関係を広げてきた。やはり、生の舞台を観る空間を共有することで、学校での「みんな一緒に」とは違った親近感があるのだと思う。芝居を見るのが好きではあるが、優先順位からいえば部活の方が上だし、なくてはならないものでないかわりに、あってもいいものであるらしい。

ところが、近年全国的にみてもどこの子ども劇場も会員数を大幅に減らしている。長引く不況の影響で余暇・娯楽の域にある観劇など、真っ先に削られる運命だとは思うが、どうも価値観の変化がその理由なのでは、と思われる。子どもに掛けたお金の中身が変わってきた、つまり親が出すお

金は塾・アミューズメントへと流れていき、文化費はゼロでもよいと考えられているようだ。つまり、何にお金を掛けて安心を得られるか……それは一昔前のそれとは違つて、バブル時代のツケがこんなところにまで波及して、曰く「よい塾に入ないと受験の時苦労する」、曰く「せっかくの休みに行くんだつたらDラングで存分に遊ばなくちゃ。新しいイベントは絶対見なくちゃ」という具合に子どもがブランド物を持つことや、携帯電話の料金がかさむことには無頓着であるのに対して、月に千円ほどの会費は惜しいらしい。

要は、「楽して、便利に」というものに弱いのであって、高価な教材や講習料などをケチると不安なので「我慢しなさい」とは言えないのだ。「うちはずつち、よそはよそ」などと言わされて育つた親はもう少なくなってきたようだ。だから、我慢のできない子どもが増えている。親自身が我慢の経験がないのだから、「これを見我慢してこっち

を」とは考へない。考へたにせよ、それはどちら

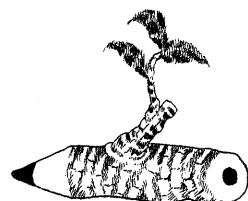
が楽か、便利かにおいてである。流行発信源の女子高生たちのあいだではそれが「かわいいから」という理由でもっと曖昧になつてゐる。長く使えるかどうかとか、本当に必要かということはあるかどもかと、判断材料にはならないのだ。もっと言えば「みんなが持つてゐるから」「誰それが持つてカワイイから」が優先する。オリジナルはないのか!と思ふ。それが価値観の違ひなのだろう。

「見る目」というのは、育つた環境によつて作られるのではないだろうか。いろいろな体験をして、自分を知り、相手にも知らせ、表現していく。その中で培われるものが「みる」ことである。中教審の調査で現代の子どもは表現力が乏しいとあつた。ちゃんと見ることができない子に表現などできることは少ない。きちんと人と関わって、自分をよく見て知つていなければできないのだから。そのくせ、「自分なりの解釈」をよくするようと思ふ。

う。

よく耳にする「僕的に」は「わたし的には」ということである。マイベースは利己主義とは違う。掘り下げたり、深めたりすることを大人（多くは先生や親）が要求すると、するりと身を交わして逃げようとする。抜き差しならぬ状況を回避するのが実にうまい。不況で就職難というが、どこの企業もそんな人材を欲しがらないと思う。幼児期からそれは始まつてゐるのだから。幼稚園の教諭をしている友人から聞く話では、殆ど親の方に問題あり、だそうである。人の話を聞けない子は、親に注意しても親が怒り出すケースが多いというのである。

息子の部活の保護者会が新年早々、開かれた。顧問の先生が言うには親の細やかな愛情が子ど



特集〈みる〉

もをダメにする、のだそうだ。極論だが、的を射ていると思った。子ども自身が好きでやっているスポーツ。寒からうが、つらからうがやりたいからやるのであって、大変なことではない。やらせてもらえる環境を作つてあげたのだから、口出しえべきではないと思う。ところが、どの親も我が子のことしか考えられない。結果、子どもは子ども同士つながれない。自分さえよければいい。ダメなヤツは見捨てる……そんな状況でチームプレイなどできなかろう。いくら個人技が秀でていてもそれでは勝てない。部活だけでなく、それは普段の生活にも影響してしまう。ところが、親たちは、「ひとの心配をする暇があつたら自分のことをやれ」と競争心を煽る。いきおい、自己チューのプレイヤーが増えてしまう。

子どもは壁にぶつかることも無くひ弱になつてしまふ。ギリギリの我慢や想像力を働かせて必死に取り組むということを知らずに育つてしまう。複

雑な人間関係や様々な挫折感を味わうことなく（親が整えた）安全で平たんな道を行く。そこに表現力など育とうはずがない。やはり、子どもをだめにしているのは大人であるらしい。保護者会の中で発言の際に名乗つたのはたつた二人だった。基本的なマナーもできていなくて、子どもの躾などできるわけがない。いや、待てよ。少なくともそんな親の姿を「見て」は育つのかもしれない。もうひとつ、顧問の他にコーチが言つた言葉……。「やつてる、やつてるというヤツに限つてやつていません。やつてるヤツはやつても満足していません。もつとさらに先を見ていますから、自分に満足していません。それは、サッカーだけではなく、勉強にも表れます。勉強しているのに点がとれないのは、やっぱりやつてないんですね」。

大人もそうだと思った。新年早々、反省！

（子ども劇場会員）

「よかれ」を見つめ直す手がかり

としての「物の圖れ點」の意味

佐伯 一 弥

はじめに

保育の実践が常にその行為主体である保育者の子どもに対するその都度の「よかれ」という思いに基づいていることを踏まえると、保育実践を対象とする研究においては、「この「よかれ」を探り上げることなしに進める」とはできないと考える。こうして私は、保育

実践を対象とする研究の本質を「よかれ」の見つめ直し（re-search）に見出してきた。

けれどもそのように考えたところで、実際にそういった見つめ直しを具体的に進めていく手立てを予め知っているわけではなかった。確かに、例えばカンファレンスなどという言葉に惹かれ、それに関する記述に目を通すとき、それが先の見つめ直しに有効であ

るかもしれないという予感をもたらすことはある。しかし、その具体的な内実については自ら体験してない以上、自らの実感に根ざした妥当性を得ることはできない。そこで、様々な研究論文を読んでいく一方で、自らも保育実践の現場に臨んで手探りながらも一つの取り組みを立ち上げて進めて、自らの研究の在り方に対する考え方をまとめようと考えた。

当初の試み

こうして私は、一昨年の五月より、秋田県のある保育園に約三ヶ月の間隔を置いて訪れている。一回の訪問では一週間ほど滞在することにしており、その間に様々な観察や記録の方法を行なうほか、午睡の間やほとんどの子どもたちが降園した後など、限られた時間の中で保育者と話し合いの場をもち、先に述べた見つめ直しへの途を探っている。

このような話し合いにおいて、はじめのうちは、私

は自分でとった記録を提示しながら、それぞれの場面における保育者の意図や子どもへの思いを聞き出し、それに基づいて見つめ直しの作業を進めていこうと試みた。しかし、実際に始めてみると、ある問題に直面することとなつた。それは、記録を提示しながらその時の思いを伺おうとしても、その場面は思い起こせても、その時の思いが明確には思い出せないということにある。確かに、繁忙な一日を通じて生起する様々な状況の中で子どもたちに対応していくことを鑑みるとき、それらの細々とした点にまで逐一意識に留めていふことは難しいことだろう。そして、このことと関連して、このような聞き方のスタンスをとる限り、保育者も自らの体験した世界の説明役にとどまってしまい、共にそれへの「よかれ」を括りだし、見つめ直そうというところまで辿り着くことが難しくなることももう一つの問題として挙げられる。

そこで、次の訪問にむけて、見つめ直しへの新たな

アプローチを考えることにした。

遊びの風景から考える

そして、ここに至つて本稿の主題である「物の置き場」が登場することになるのだが、その前にそこまでの経緯を辿るため、この保育園において私が普段目にしている園生活の風景の中から登園後の遊びの様子を描写することにしたい。

朝八時に私が保育園に到着すると、既に多くの子どもたちが登園しており、めいめい遊びを立ち上げている。その後、登園してきた子どもたちも、自分のクラスのロッカーに荷物を置いて一連の身支度を終えると、その部屋で遊びを始めたり、別のクラスに出向いて遊んだりする。三歳未満児クラスの子どもたちも、兄や姉あるいは同じ集落に住む年長の子どもたちに手を引かれ、遊戯室や五歳児クラスの保育室で遊んでいたりする。

遊戯室では、戦いごっこを通して壊れた飛行機やロボットを修繕したり改良するために定期的に帰還する子どもたち、ままごとを楽しむ子どもや絵本を開いている子どもの他に、子どもたちの提出した連絡帳を整理する保育者の様子を見つめながら、タイミングを見計らって手にしている紙を差し出してよく細く堅い剣を作つてもらうことをお願いする子どももいる。

このような光景を初めて目にしたときの私の印象は、そこにただ混沌を感じるというだけのものであつた。

しかし、次第に子どもの名前を覚えていきながら、観察を続けていくと、二、三日もすればどこで誰がどのような遊びをしているのか、ということはおおよその見当がつくようになつた。

例えば、先程の戦いごっこで用いられる飛行機やロボットの「工場」になるのは、四歳児クラスの保育室であることが多い。そこでは、三歳未満児クラスから五歳児クラスまでの子どもが集まり、車座になつてしゃべりながらブロックを組み立てている。そして、互いに出来たことを確認すると、再び廊下や遊戯室へと出ていく。三歳未満児クラスの子どもたちも年長児の子どもの姿を見ながら同じように、同じ色のブロックをシンメトリーに組み合わせるなどして飛行機やピストルなどを作つてゐる。

また、このことと併せて子どもたちの遊び出しに関するいくつかのパターンを見出すことが出来た。その一つが、ブロックや箱積木を用いて遊ぶ際、まずはそ



れを一旦床にばらまいてから始めるというものである。こうした遊びの展開には様々な見解があると思われるが、先の車座もこのようにして床の上にばらまかれたブロックを取り廻すように陣取られていることを見ながら、私は自らの幼かつた頃の遊びの姿と重ね合わせ、そのようにばらまいた子どもたちの思いを汲み取つていた。すなわち、自分の作ろうとするイメージが明確であるほど、それに必要な色や形のパーツをすぐ取り出せるようにしたいという思いである。しかし、一方でそのようにばらまかれる場所については、それがあまり良好なポイントではないように感じられた。それというのも、箱積木にしても、ブロックにし

てもそれがばらまかれるところは、それぞれ四歳児クラスの保育室と五歳児クラスの保育室を結ぶ通路の役割も果たしている遊戯室のまさに通り道にあつたるところであつたり、保育室の戸口付近であつたりするからである。

当然、積み木やブロックをひろげて遊び始めようとしても、そこへ他の子どもが通ることによつて遊びはしばしば中断されることになつてしまふ。

このような場面を目にするとき私は、なぜわざわざ子どもたちはこのような場所に撒き散らすのだろうか、と素朴に感じた。そこで、改めて次の朝の様子を観察すると、子どもたちは意図的にそのような場所を選んでいるのではなく、子どもたちの登園に先立つてブロックの入ったバスケットや箱積木が置かれていた場所であつたことがわかつた。

そこから、私はブロックや箱積木などが置かれている場所をかえることによつて、撒かれる場所もかわり、遊びの中斷といった事態もある程度回避されるの

ではないかと思つた。

こうした思考の過程が、いわゆる環境構成の考え方には則つてゐることはいうまでもない。しかし、前述の見解を改めて据えなおしたとき、このことは単に保育方法としての環境構成の問題としてのみ捉えられるものではなく、そこでの思考作業における保育者の意図や思いを捉えようすることによつて、この研究の主題である「よかれ」の見つめ直しへのアプローチを構想することが出来るのではないかと考えた。

すなわち、遊び場の成立の重要な契機となる「物の置き場」それぞれに対する保育者の意味づけを聞き出すことから、その意味づけの背景にある「よかれ」を検討することができるのではないか、と考えたのである。

先程の私の置き場所の移動に関する見解についても振り返ると、少なくとも次の「よかれ」をそこに見出しができる。一つは、他の子どもたちによつて中

断されることなく遊びの場が安定することによって、その遊びが持続することをよしとしていること。そして、この時点においては、同じ遊びを展開するメンバーがそのクループを継続していくことをよしとしていることである。もちろん、これらは一介の訪問者に過ぎない私が、この保育園の子どもたちの遊びに関するそれまでの経緯やその後の見通しをもつことなく、

その場において素朴に得たことであり、このような見解が妥当なものかどうかはわからない。けれども、このような形で自らの「よかれ」を括り出す可能性を確かめることはできる。

なお付け加えると、この保育園の場合、午睡は各保育室で行なわれることから、そのスペースの確保のため、いわゆるコーナーの常設が難しい。併せて、勤務シフトが異なることから、子どもたちの登園に先立つて遊び場を構成しておくことにも限界が生じることとなる。結果的に、先に述べたように子どもたちは登園

後、前日に片づけたその場所から物を取り出し、その後で遊びを立ち上げ、展開することとなる。こうした事情から、少なくともこの保育園の園生活のスタイルをふまえて保育の見つめ直しを行なおうとする場合、「物の置き場」に着目することが有効になるのではないかとも思われたのである。

「物の置き場」を手がかりとした

話し合いの展開とその意味

そこで、その後の訪問においては、先に述べたような当初の手順ではなく、「物の置き場」を手がかりとして、話し合いを進めていくことにした。それに併せて話し合いの場も、保育者全員が集まっていた事務室からそれぞれの保育室へと移すこととした。

子どもたちのいない保育室に身を置いて、様々な物を見渡しながら話を進めていくと、そこに誰が集まつてどのような遊びが展開されるかという場の具体的な

イメージを、保育者がどのようにもつてているかが語られる。それぞれの置き場に収められている物が用いられるそれぞれの遊びを取りあげながら話を進めていくと、その保育者がそこで子どもたちの姿をどのように捉えているかが、その語りの中で現れてくる。そして、それを踏み台として、そうした子どもたちの遊びへの理解や、特定の子どもへの課題意識などが語られることとなる。また、それまである物の置き場について特定の意味づけを行なつていなかつたと保育者自ら振り返る場合にも、逆に改めて物の置き場を意識的に捉え、子どもの遊びの姿と関連させながら置き場の移動を考えることを通して、そこに込められたへよかれを確認することができる。

こうした話題の展開の仕方において、そこで語られている子どもの姿は保育者の想起に基づくものであり、特定の日の特定の時間の姿の厳密な再現に基づくものではない。このように記すと、子どもの遊びの事

実関係をふまえた確固たる証拠がなく、想起の内容も適当に流されてしまうのではないのか、という懸念をもつ人もいるかもしれません。しかし、少

なくとも私はそう思わない。それは、私の持つている遊びの場のイメージと保育者のもつそれとが大きく異なつてはいないことよりも、むしろ、話し合いの場において「事実」というものをどう扱うかという点にかかっていると考えられるのである。

当初の試みのときのように、過去の「事実」を確認しながら話を進めていこうとするとき、その作業を行なつてゐる私（たち）は、まさにその「事実」なるものをつけたとしている。しかし、いかにもそういう一つの事実なるものを捕まえようとしても、そこには限度がある。例えば、ある子どもとの切羽詰まつた関係において成立した「事実」は、その子どもとの直接的な



対面状況にない降園後の話し合いの場で捉えようとしても、そのアクチュアリティ（あるいは、生々しさ）は全く異なる。そう考えると「事実」とは、いま、この、自分が身を置いている状況との関係においてその都度成立することとして捉えられる。

こうした事実観をもとに、話し合いの場の状況性に目を向けると、先に述べたように当初の試みにおいては、過去の「事実」をいかに再現し、つかもうかといふことに力点が置かれていたことがわかる。この意味で、これらの場では、提えるべき子どもの姿にまだ出会われていないと見える。それに対して「物の置き場」に着目しながら話を進めていくとき、保育者も私も自らの想起の中で既に子どもと出会っている。

冒頭で述べたように、自らの「よかれ」を見つめ直すことをその本質として研究を捉えようとするとき、記録に表現されているところの「むこう」の世界をつかむことから、「こちら」の「よかれ」へと方向転換

を、いつか図らなければならない。

このようにおさえると、先程述べたように「物の置き場」を出発点とした話し合いのように、端から「むこう」の世界を立てるだけでなく、「いま、ここ」想起の中でも子どもと出会うことから、そこへ向けられた自らのまなざしを捉えることも、より容易になると思われる。そして、そこに込められた自らの「よかれ」を取り出すという次のステップに取りかかりやすくなるのではないかと考えられるのである。もちろん、このように「物の置き場」を手がかりにした話し合いが、「よかれ」の見つめ直しが的確に出来ることを直接保証するわけではない。話し合いの進行や話題の持ち方にはなお課題が残っていることは確かである。しかし、それでもなお「物の置き場」は先に述べたような点で「よかれ」の見つめ直しの手がかりとしての意義をもつことを確認しておきたい。

編集
会員
公報
記

今月の特集は「みる」です。四人の方に四様の「みる」について書いて戴きました。これを機会に子どもとの暮らしの中のいろいろな「みる」に目を向けてみたいと思います。

*
りません。紫陽花の葉の裏や大きな石をひっくりかえして集めます。ついには、ほんの小さいものまで、つぶさないようにつまんで、やつと数がそろいました。

家に帰り、ほっとしたのもつかのま、どうやって一晩過ごそうかと二人で考え込みました。結局、駄菓子屋さんであめ玉を入れるガラスの容器のうな中の見えるものに、紫陽花の葉を枝ごといっぱい入れ、その中にに入れました。かたつむりはつた。駅への道の途中にたくさんいる場所があり、大小のかたつむりが行き進しているのを見ることもありました。雨の日にそこを通るのが楽しみでした。娘が、組のお友達の数だけみつけて持つて行こう、と言いました。二人で雨の中を出かけました。

定価五五〇円（本体五四円）
発行 平成十二年六月一日
編集兼発行人 田代和美
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目
お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社
〒108-8620 東京都港区三田五丁目
株式会社 フレーベル館
〒113-8611 東京都文京区本駒込

発売所 印刷所
〒108-8620 東京都港区三田五丁目
株式会社 フレーベル館
〒113-8611 東京都文京区本駒込

六月の雨の中を四歳の娘とかたつむりを探しまわったことがあります。駅への道の途中にたくさんいる場所があり、大小のかたつむりが行き進んでいるのを見ることもありました。雨の日にそこを通るのが楽しみでした。娘が、組のお友達の数だけみつけて持つて行こう、と言いました。二人で雨の中を出かけました。

次朝、大小のかたつむりが葉や枝を上へ上へと上っているのを見ました。体を伸ばし一齊に上へ向かう。その様は不気味でした。それまで、傘をさして眺めていたそれとはまるで違う生き物に見えました。（A）

いざ探し始めるとなかなか見つか

幼児の教育

第九十九巻 第六号

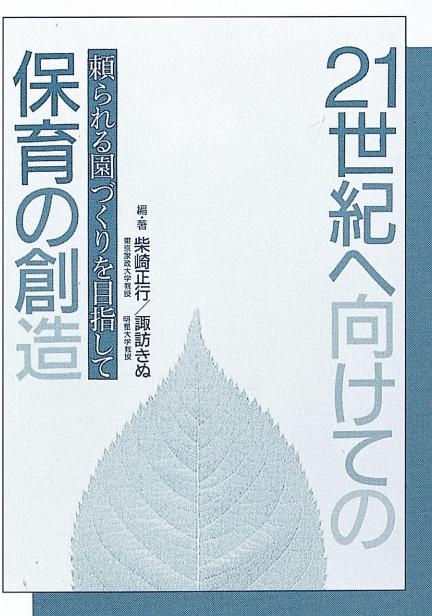
（二〇〇〇年六月号）

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

頼られる園づくりを目指して

21世紀へ向けての保育の創造



好評
発売中

幼稚園教育要領、保育所
保育指針の改訂を踏まえ、
単なる制度改革解説の域
を越えて、先進的な実践
事例を取り上げながら、
改革における意義や問題
点にも言及しています。
まさに今現場で知りたい
と強く望まれている内容
となっています。

柴崎正行・諏訪きぬ 編著

A5判 224頁 定価：本体2,000円+税

キンダーブックの
フレーベル館

最新刊!!

〈平成11年改訂〉対応

保育所 保育指針 解説



平成11年に改訂された新保育所保育指針解説書の決定版!!

今回の改訂作業の中心となつた石井哲夫・増田まゆみ先生と保育界を代表して岡田正章保育学会会長とによる責任編集。

保育者の疑問に答えるQ & Aに1章をさくなど、わかりやすく、ていねいな解説を心がけた一冊です。

石井哲夫・岡田正章・増田まゆみ／編

A5判 240頁 定価：本体1,500円+税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。